

順天堂医院ニュース 2025 NO.90

2025年1月号(新年号)

新年あけましておめでとうございます。

2024年4月から新型コロナウイルス感染症と共存して診療する体制に変更致しました。その後の病院運営の状況について本号で述べます。

病院の体制を新型コロナウイルス感染症との共存体制としてきましたが、幸いこれまでクラスターを生じることなく病院を運営しています。一方でこれから寒さが厳しくなりますので、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザなどの感染症対策を強化して臨んで参ります。

強化した救急体制は救急科医師、総合診療科医師を中心に看護師、救急救命士、看護助手、医師事務補助員

に加えて診療看護師もメンバーに加え、多くの救急患者を診療しています。タスクシフト、タスクシェアを行いながら効率的な救急診療を行い、適切な入院対応を行っており、研修医の指導をしながら救急患者を受け入れる流れが円滑になって参りました。

新型コロナウイルス感染症は、患者さんの診療所や病院への受診の流れを変えましたが、地域の医療と密着している順天堂医院の新患患者の受診や入院が徐々に増えており、医療連携の成果が実感できるようになってきました。そしてかかりつけ患者さんの救急を積極的に受け入れるとともに、病床稼働率を上げるべく、空床の可視化も行っており、当直医が入院を受け入れやすくなっています。

患者さんの待ち時間対策として、会計待ち時間対策はあと払いクレジットサービスの活用(1,200人/日)もあり、待ち時間が平均6分前後と減少しています。また、中央採血室の待ち時間も平均7分前後と減少しています。今後、他の待ち時間の多い部署での更なる待ち時間減少を進めていく所存です。

患者さんに高度な医療を安全に行うと共に医療者に研修させる、というのが特定機能病院の使命です。引き続き、医療の安全、医療の質を堅持しながら診療を続けて参ります。今後とも皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。



順天堂大学医学部附属順天堂医院
院長 桑鶴 良平

各記事にあるQRコードを読み込むことで、各診療科および各部署のHPを開くことができます。ぜひ、ご活用ください。

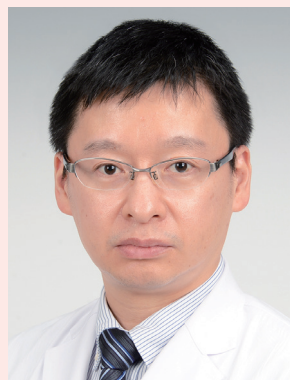


この度、2024年10月1日付で順天堂大学医学部小児科学講座の主任教授に就任いたしました。

昨今は少子化が社会問題となっておりますが、当院では2019年に開設した周産期センター（11階A、BN病棟）、小児医療センター（10階A、B病棟）での産婦人科、小児外科をはじめとする関係各科とシームレスに連携した診療が益々充実しております。

当科の魅力は小児疾患の全分野に対応する12の専門グループ（消化器、肝臓・代謝、アレルギー、循環器、神経、血液・腫瘍、内分泌、腎臓、感染症、心の発達、新生児、栄養）があり、各エキスパートが専門診療を行っていることです。私が専門とする当院の新生児診療部門では、早産児や小児外科疾患、先天性心疾患、脳神経外科疾患などのあらゆる新生児疾患に対応できる数少ない施設の一つとして、他施設からの新生児搬送受け入れは100%を維持し、地域医療に貢献しています。

私はこれまで、順天堂大学大学院や留学先のミュンヘン大学で母乳栄養や多価不飽和脂肪酸の重要性について研鑽を積み、現在は Developmental origins of health and disease という概念に着目し、胎児期の環境と将来の生活習慣病リスクについて動物実験や臨床研究を継続しています。私が担当する新生児フォローアップ外来では、これらの知識を活かした診療を行っております。お子様のことであれば何でも、お気軽にご相談ください。



小児科・思春期科
東海林 宏道



この度、2024年10月1日付けで順天堂大学医学部小児外科・小児泌尿生殖器外科の主任教授に就任いたしました。生まれたばかりの新生児から多感な思春期まで、幅広い年齢層の患者さんを対象とする小児外科は、胸部なら肺や食道、腹部なら消化管や肝胆膵、更に骨盤内では泌尿生殖器などと様々な病態/疾患に対する手術を行います。その中で私は、アメリカ留学時の上司が小児低侵襲外科手術（胸腔鏡/腹腔鏡/ロボット支援手術など）のパイオニアであったことから、「身体が小さく、脆い小児にこそ低侵襲手術を」の理想とともに同分野を専門としてきました。現在では国際小児内視鏡外科学会や太平洋小児外科学会などにおいてアジア代表理事を務め、常に最先端の情報を共有し「世界基準の正しい手術」を意識し、全教室員とともに実践しています。また当教室は、日本初の小児外科学講座として誕生し、現在、関連施設を合わせると日本全国で行われる小児外科手術の1/5以上を担っています。その関連施設とともに我々は、単に経験に頼るのではなく、海外有数施設との恒常的な連携により、また産科・婦人科および小児科・思春期科とともに周産期センターや小児医療センターを更に充実させることで、今後80年、100年にも及ぶ小児患者さん一人一人の人生に思いを馳せた手術を行ってまいります。手術が必要かどうかハッキリしない症例も含めまして、どうぞお気軽にご相談ください。



小児外科・小児泌尿生殖器外科

宮野 剛





神経内分泌腫瘍治療のご紹介

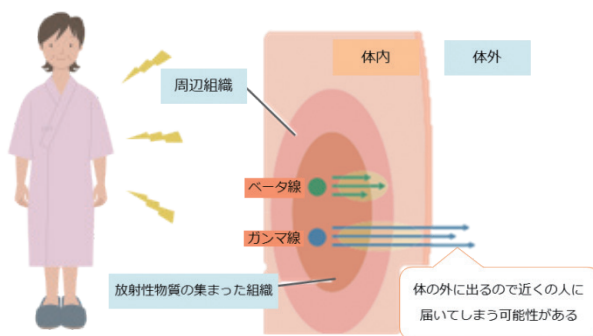
神経内分泌腫瘍 (NEN: Neuroendocrine Neoplasm) は、膵臓・胃・小腸などの消化管・肺など様々な臓器に発生するきわめて稀な腫瘍です。この腫瘍に対して、新たな放射性医薬品 (商品名:ルタテラ) を用いた内用療法が 2021 年に保険承認され、当院でも運用を開始いたしました。内用療法とは特定の腫瘍細胞だけに選択的に取り込まれる放射性医薬品を体内に投与し、そこから放出される放射線 (ベータ線) によりピンポイントで腫瘍細胞を死滅させる治療法です。

薬剤が腫瘍に集まる事を確認するため、事前に核医学検査であるオクトレオスキャン検査を実施する必要があります。(順天堂ニュース 2023 年 10 月号にてご紹介)

治療はルタテラを 8 週ごとに最大 4 回、核医学検査室にて点滴で投与します。

ルタテラは半減期約 6 日で減衰するほか、尿から排泄され体内から急速に消失し

ますが、投与直後は体から微量の放射線 (ガンマ線) を出しています。そこで周りの人への影響を避けるため、医療法で定められた基準の放射線量が低下するまで特別な (放射線が管理できる) 病室に滞在する必要があります。入院は 2-3 日間程度です。治療翌日に腫瘍への薬剤の取り込みを確認するためガンマカメラにて全身撮像後、退出基準を満たしたら退院となります。



治療当日

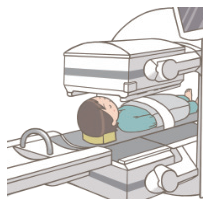
薬剤投与



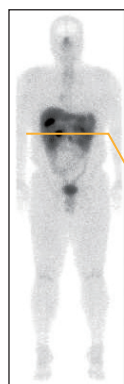
午前中開始 4 時間程度

治療翌日

全身撮像



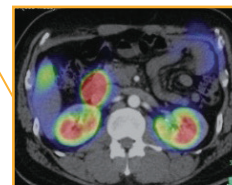
30 ~ 40 分程度



全身画像



当院のガンマカメラ装置



CTとの重ね合わせ画像

放射線部では安心して治療・検査を受けていただけるよう、各科との連携を密にとり体制を整えております。



輸血時に使用する血液製剤の種類

輸血にはさまざまな種類の血液製剤があり、それぞれの成分ごとに使用目的や保管方法が異なります。以下に、主な血液製剤について紹介します。

●赤血球製剤

貧血の患者さんに使用され、酸素を全身に運ぶ役割の赤血球を補います。保存温度は2～6℃で、有効期限は採血後28日です。

●血漿製剤

血液が凝固するために必要な蛋白質が欠乏している患者さんに使用され、血液凝固の働きを補助します。保存温度は-20℃で、有効期限は採血後1年間です。

●血小板製剤

血小板が減少している患者さんに使用され、出血を防ぐ役割を果たします。保存温度は20～24度で、有効期限は採血後4日間です。

現在は、患者さんの状態に合わせて必要な成分のみを輸血する「成分輸血」が主流であり、不必要な成分は輸血しないようになっています。順天堂医院の輸血・細胞療法室では、日本輸血・細胞治療学会のガイドラインに準じて、安全性を確保したうえで輸血時の製剤を提供しています。

赤血球製剤



血漿製剤



血小板製剤





院内製剤とは・・・？



院内製剤とは、病院薬剤師により院内で調製された薬のことを指します。市販されているお薬では、効果が得られない場合や、市販されたお薬そのままでは、治療に使用できない場合に個々の患者さんに合わせて院内製剤を調製しています。



また、院内製剤の調製にあたっては、有効性・安全性に十分に配慮しています。

当院の院内製剤には、主に塗り薬の軟膏剤やローション剤、吸入薬、粉薬等があります。



例えば、軟膏剤では、異なる効果を持つ複数の塗り薬を配合することで、お薬の相乗効果を期待できるようにした製剤があります。また、注射薬を原料にした、吸入薬等も調製しています。



しかし、院内製剤は、市販のお薬に比べて、安定性が十分に確認されていないことが多く、使用期限が短い製剤も多いため、使用期間や保存方法に注意が必要です。

お薬を安全かつ、効果的に使用していただくために、お薬の説明や使用期限等、個別に相談もおこなっていますので、窓口の薬剤師まで気軽にお声がけください。



がん治療中のお食事について

「絶対に食べてはいけない物がありますか？」

「がんになったら肉は食べない方がいいのですか？」

「糖質を摂るとがん細胞が大きくなると聞きましたが、ご飯は控えた方がいいですか？」

これらは、栄養士ががん患者さんからよく聞かれる質問です。

結論から言うと、がんになったからといって絶対に食べてはいけない物はありません。病状に応じて少量の摂取にとどめたり、一時的に控えるよう指導されることはあっても、一生食べられない物はないのです。

肉については、国際的な研究から「牛や豚などの赤肉やベーコンなどの加工肉は、大腸がんのリスクを上げることがほぼ確実である」と言われています。赤肉の摂取は1週間に500gを超えないことが推奨されていますが、決して「食べてはいけない」と言っているわけではありません。

また、糖質制限も近年話題になっている食事療法ですが、マウスを使った研究ではがん細胞が縮小したとの報告があるものの、人を対象とした報告ではがんが消えた・あるいは進行を遅らせたという質の高い報告はありません。

がん治療を続けていくためには体力が必要です。米、肉、魚、豆類、野菜や果物などをバランスよく食べ、色々な食材から様々な栄養素を摂取することをお勧めします。





救急外来の看護師が担う「院内トリアージ」

「トリアージ」という言葉を聞くと、災害医療を思い浮かべる方が多いかもしれません。でも実は、救急医療の現場では日常的に行われています。トリアージの語源は、「選別」を意味するフランス語「トリアージュ (triage)」に由来し、多くの傷病者に対して治療の優先順位や緊急性を判断する重要な役割を持っています。当院の救急外来でも、急な体調不良やケガで訪れるさまざまな患者さんを対象に行われています。

救急看護師、特に「トリアージナース」と呼ばれる看護師は、五感を駆使して患者さんの観察や評価を行います。そして、生命に関わる病態が隠れていないかを見極めつつ、診療の優先順位を決める「院内トリアージ」を行っています。この院内トリアージには、迅速な判断力と高いアセスメント力が必要で、私たちは経験豊富なトリアージナースの育成にも力を注いでいます。

さらに、看護師は治療や入院の対応だけでなく、患者さんが帰宅後も安心して生活できるよう支援し、多職種と連携したサポートを行っています。救急外来に訪れる患者さんのニーズはさまざまです。患者さんに寄り添い、迅速に対応できる救急外来を目指して、これからも取り組んでまいります。



今日からはじめる

健康講座



1月号



総合診療科 教授
小林 弘幸

今年1年頑張るための 健康の極意

新しい年を迎え、新たな気持ちで1年の目標を立てる方も多いのではないのでしょうか。目標を達成できる健康な体づくりにもぜひ目を向けてみましょう。食事、睡眠、運動は、生活のリズムを整えるための三種の神器です。まずは起きて1時間以内に朝食をしっかりと食べることが重要です。朝ごはんを食べることで、時計遺伝子にスイッチが入り、体が朝であることを認識します。朝の時間帯はゆっくりと過ごすことで呼吸が安定するため、自律神経のバランスを整えることにつながります。朝は時間に追われがちですが、自律神経は一度乱れると3時間は戻らないので、余裕を持っておくことをお勧めします。次に、決まった時間に就寝することを心がけましょう。徹夜明けにテンションが上がる経験をしたことがある方も多いかもしれません。この状態は、交感神経が跳ね上がり、副交感神経が低く、血流が悪くなるため、作業効率が非常に下がります。適切な睡眠時間は人によって異なりますが、毎日同じ時間に眠る習慣をつけることが大切です。最後に、30分程度のウォーキングやスクワットなど、適度な運動を継続しましょう。運動をすることで、自律神経が整い、睡眠の質や免疫力の向上につながります。

食事、睡眠、運動の共通点は、血流を上げて生活のリズムを造ることです。これによって自然と自律神経バランスが整うため、体調を崩しにくくなります。まずはできる事から1つずつ取り組み、1ヶ月継続することを目指しましょう。

順天堂大学医学部附属順天堂医院

〒113-8431 文京区本郷3-1-3

TEL : 03-3813-3111 (大代表)

編集 事務部 管理課

発行 事務部 管理課 (2025年1月発行)

ホームページ

<https://hosp.juntendo.ac.jp/>

順天堂医院

検索



【順天堂医院HP】